

予定されていた観察場所を削る等、コースを変更しつつバスを乗り継いで徒歩観察を行った。

朝、宿舎を出てバスで一旦館山駅へ行くと、再びバスに乗り白浜へと向かった。途中、車中から景色を眺めていると青々とした山並と畑とビニールハウスが目についた。白浜のカーネーション、ストックは名高い。ビニールハウスの大半は花卉栽培のためのものだろう。一方、露地で花卉栽培は特に目に止まらなかった。花卉栽培は海岸の、冬でも湿暖な気候を利用して、耕地不足のため収入の多い商品作物を作る必要から始まった。草花の露地栽培は畑10aの収入が水田30aの収入に劣らず、花畑からの収入は農業収入の半分以上を占める。安房では露地栽培が約75%を占めるが、近年ビニールトンネル、温室が増えてきた。このように恵まれた気候にもかかわらず、温室等が増加するのはなぜか、と私は疑問に思った。

白浜の島崎でバスを降りると北には房総丘陵が連なっていた。房総丘陵は今でこそ暖帯林で覆われているものの山麓の海岸線跡から、かつて侵食を受けた後、隆起して風化されたと考えられる。また山腹には海食崖跡の段丘もある。野島崎から房総丘陵を結ぶ線上には沼・元緑・大正段丘を含む5段ほどの侵食段丘が見られる。島崎から野島崎へ緩やかな坂を下る途中に、蛇行した水路のある畑が広がっていた。これは政府の減反政策により、以前の水田に水路を引いて少しでも水はけをよくし、畑として利用しているためである。

野島崎灯台上から東を見下ろすと波に洗われている岩列が見えた。砂岩・泥岩から成る畑累層のうち侵食作用に耐えた堅い岩質部分が列をなして見えるのが岩列で、関東大震災時に隆起した。

他にも野島崎には観察に値するものが多くあっ

た。例えば垂角礫を含む岩石、ポットホール、互層、風紋のような模様をもつ砂岩である。野島崎の付け根では、キーベルトとして役立つ白い2筋の地層も見られた。

バスでフラワーパークへ向かい昼食をとったが、パークの見学は割愛して徒歩で布良へ向かった。家屋の建ち並ぶ細い急な坂を下ると、人工的に掘り込まれた布良の港があった。

次に平砂浦へと歩いた。平砂浦ではかつて一面に砂丘が広がっていたが、砂が風で飛ばされ人家等に被害を与えるため、砂止めが必要となり人工植林が行われ固定砂丘化が進められた。しかし浜に打ち寄せられる上砂で砂丘は今だにわずかながらも拡大の兆しを見せている。また平砂浦では、貝殻の破片・砂・礫等が海水に溶解しているカルシウム等の石灰質で固められたビーチロックが見られるはずだったが、実際には観察されなかった。

今回の巡検では中高校生時代から教科書や資料集でしか見たことのなかった岩石の侵食作用跡やポットホール、様々な地層等を自分の目で直接、観察することができ、満足だった。

房総半島はこれまで私の生活にはあまり関係のない土地だったため、特にこれといった興味は抱いていなかったが、巡検で自ら歩いて観察して回ったことにより、房総に興味を持った。というのも我々が1日の観察で訪れることのできる限られた場所だけでも地学で扱われるような様々の作用、地層等が実例として豊富に見られたからである。

今まで房総と聞いて単純に「花畑」くらいしか連想できなかったが、今後は今回の巡検で得た知識を大切にして房総を見ていきたい。

(10月1日～2日 浅海教官指導)

国土地理院巡検

山 田 昌 代

初めての館山巡検から1週間もたない秋休みの終わりに、2度目の巡検として国土地理院の見学を行った。

8時30分、大学に集合、バスに乗り込み、常盤自動車道を通って一路筑波へ向かった。周囲は、

田畑の広がる何ということはない田舎町だが、インターを降りてしばらく行くと様子が変わってきた。学園都市に入ったのだ。学園都市内は、道路区画や住宅がきちんと整備されすぎていて息が詰まるような感じがした。

地理院に到着すると、まず仕事内容の概要を伺い、その後2グループに分かれて見学を開始した。

解析図化室。部屋に入って最初に目についたのはカタコトと音をたてているコンピューター。何をしているのかと覗き込んでみると、なんと地図を描いているのだった。地理院では、従来人間が行っていた図化・編集・製図等の作業も、コンピューターを用いて行う研究を進めているとのことだった。

中縮尺図化室では、対空標識の設置、空中写真撮影から、空中三角測量・現地調査を経て、図化素図そして編集素図の作成までの過程についての、説明があった。一方ではコンピューター化が進んでいるのに、2枚の空中写真から等高線や道路を描き出す作業や、スクライプ原図の作成など、まだまだ人間の手作業の割合が高いのには驚いた。

昼食後、重くなった臉を必死に支えながら、地図情報室で数値化についてのお話を伺った。国土情報の数値化には、国土数値情報、細密数値情報、基本図数値情報の3種があり、これらのデータは国や地方公共団体の計画・調査の資料として広く利用されているそうだ。ふと気がつくと、私達を案内して下さった地理院の方も、椅子に腰か

けてウトウトしているようだった。

解析画像図化室、地図写真撮影室を見学し終わった頃には、1日中立ち続けていた疲れがピークに達し、廊下に座り込んでしまった。情けない。その廊下に貼ってある地図製版印刷工程の図の解説を聞き、実際の作業の見学をした。

次はレーザー測距検定棟。昭和30年代はインバル規線尺、続いて電波、光線などを用いて測量を行ったが、昭和40年代からはレーザーを利用するようになったそうだ。レーザーは温度や湿度に敏感なので、説明を聞く間も、入口の扉はきちんと閉められていた。

最後に、全体の総括として史料館を見学して、私達は帰途についた。

今までは、国土地理院というと“地図を作成している所”という漠然としたイメージしかなかったのだが、今回の巡検で、その仕事をもっと多岐にわたるものだという事を学んだ。地震予知、宇宙開発、海洋開発など、地理院の仕事の重要性に対して認識を新たにした。

お土産に頂いた阿寒湖の湖沼図は、殺風景な私の部屋に、僅かながら彩りを添えている。

(10月7日 三上教官指導)